

『グリム童話集』注釈の試み (2) (KHM 2~3)

Untersuchungen der Anmerkungen der Kinder-und  
Hausmärchen der Brüder Grimm (2) (Nr. 2~3)

小高康正

Yasumasa Kotaka

KHM 2

Katze und Maus in Gesellschaft

「猫とねずみのともぐらし」

1 AT 15

アールネ/トムソンの分類では、「動物昔話」のなかの「野獣」の15番目「名付け親になってバターを盗む」にあたる。

この話は「狐(めんどり)が名付け親として呼ばれていると偽って、熊(おんどり)とふたりで冬の蓄えのために隠しておいたバターをこっそり盗んでしまう。彼は熊が寝ているすきに口の回り(しっぽ)にバターを塗り付ける」というものだが、グリムの話に登場するのは猫とねずみで、猫が名付け親でねずみがだまされる。

わが国でも岩手県紫波郡の「猫と鼠」の話がある。それは「猫と鼠が共同でごちそうを作って寺にしまっておく。猫は葬式に招かれたと、ひとりで行って食う。猫と鼠が一緒に見に行くとなくなっている。鼠が気づいて恨みをいうと猫は鼠を食う」というものである。この話の場合は死んだ人の名前として、「上舐、中舐、底舐」という言い方が出てくる。しかし最後は由来話のように「それから、猫と鼠の仲が今のような具合になったということである」と締めくくられている<sup>2)</sup>。日本ではこの岩手県紫波郡の話一つしか記録されていないところを見ると、あるいはグリムの話に由来するのかも知れない。

2 手稿(1810年)<sup>2)</sup> 第2番「猫とねずみ」

猫とねずみが暮らしを一緒にした。彼らは

冬の蓄えのために脂肪の入ったつぼを買った。そして教会の祭壇の下にそれを置いた。そのあとすぐ猫はねずみに言った。僕を外出させておくれ、名付け親にならなくちゃならないんだ。ねずみはそうさせた。けれども猫は教会に行き、脂肪の壺から上皮を舐めた。猫が帰ってくると、ねずみは赤んぼうになると名付けたのか尋ねた。「上皮なめ」と猫は答えた。その後まもなく猫はまた名付け親にならないといけなと言って、出かけていき、脂肪の壺を半分食べてしまった。そしてねずみが赤んぼうの名前を尋ねると、「半分べろり」と言った。最後に、ねずみが猫の出かけるのを望まず、上皮なめ、半分べろり、おかしな名前だなと言ったが、猫はもう一度名付け親になりに出かけて行った。そして猫は脂肪の壺を全部食べてしまって、赤んぼうの名前は「全部べろり」とつけたと言った。するとねずみは、全部べろり! どうもおかしな名前だ、と頭を強く横にふった。まもなく冬が来て、二人は教会の祭壇の下に隠した壺のところへ行った。しかしそれは空だった。そこでねずみが言った、これはきっとおまえが名付け親になっているときにやったのだろう。すると猫は、黙れ、さもないとおまえを食ってしまうぞ、と言った。そしてねずみが再び口を開こうとしたとたん、猫はねずみに飛びかかり、食べてしまった。

この最初のメルヒェンはカッセルのグレートヒェン・ヴィルトの口伝えによるもので、1808年にヴィルヘルムによって記録された<sup>3)</sup>。初版(第一

巻、1812年)では、題名は「猫とねずみ」から「猫とねずみのとも暮らし」とあらためられ、分量も2倍くらいに膨らまされた。ただし語り口が詳しくなっただけで、内容の変更はほとんどない。初版以来ずっと第2番目の位置を占めている。

3 グリム兄弟の注釈では<sup>4)</sup>、おんどりとめんどりの類話が紹介されている。

彼らは糞のなかに宝石を見つける。宝石商人にそれを売り、かわりに脂肪の壺を手に入れる。そしてそれを冬に備えて、戸棚の上に置いた。しかしめんどりがそれを少しずつ食べてなくなってしまう。そのことがわかると、おんどりはとても腹を立て、めんどりをくちばしで突いて死なせてしまいました。そのあとでおんどりは後悔と悲しみでいっぱいになり、「めんどりの死」(80番)の話のように、墓に埋める [Grimm, S. 7]。

他にグリムの注釈では後部ポメルン地方に、蜂蜜の壺を見つける「狐と熊」の話があることが言われている。

この話はメルヒェン・ジャンルの中では、第1番目の「蛙の王様」などの「魔法昔話」(Zauber-märchen)とちがって、動物昔話(Tiermärchen)に分類される。

「猫とねずみのともぐらし」が『グリム童話集』の第二番目に置かれたのはなぜであろうか。

レレケはグリム兄弟がメルヒェン・ジャンルの目印として、「ライネッケ狐」との関連で動物物語(Tiergeschichte)に注目していたことを指摘している<sup>5)</sup>。「ライネッケ狐」は、フランスでは「ルナル物語」の名で知られており、広く中世ヨーロッパに「狐物語」として流布していた動物叙事詩である。ドイツでは特にゲーテの作品『ライネッケ・フックス』(1793年)で有名だが、ヤコブ・グリム自身、十二世紀の写本の校訂版を出していた。

また彼らの集めた最初のメルヒェンにおいても、最初の6編は動物昔話が占めていた<sup>6)</sup>。

ペーレントゾーンはアールネとはちがった分類

法をとり、この話も「笑話」(Schwank)のなかの「動物笑話」(Tierschwank)に数えている<sup>7)</sup>。名付け親になった猫が架空に付けた奇妙な名前(上皮なめ、半分べろり、全部べろり)は確かに聞き手の笑いを誘う。この点にグリム兄弟も着目して、注釈では別の名前の例として、「縁なめ、半分べろり、全部べろり」「いただき(はじまり)、半分たいらげ、おしまい」というのもあると指摘している [Grimm, S. 7]。

また、最初の記録には見られなかったが、グリム兄弟は最終版で「世の中ってこんなものです」(Siehst du, so geht's in der Welt.)という結末の語句をつけ加えている。この表現によって、このタイプの話が内容的には<善良な(おひとよしの)>ねずみが<狡賢い>猫に食われてしまうという、一種の教訓話として強調されているようである。

### KHM 3

#### Marienkind

「マリアの子ども」

#### 1 AT 710

アールネ/トムソンでは、「聖母の子」として、本格昔話で「魔法の話」のなかの「その他の超自然的物語」に分類される。

父親が知らないで行なった約束によってその娘がある養母のものとなる。娘は禁止されていた部屋を見たことを故意に否定する。そのため口がきけなくなる。娘は王の妻となる。聖母マリア(魔女、悪い継母)が娘の子を盗む。最後に王女は自分の罪を認める。

日本では同じタイプの話は見つかっていないようであるが、関敬吾は「見るなの座敷」の話に<禁じられた部屋>のモチーフとの共通性を見ている<sup>8)</sup>。

#### 2 手稿(1810年)第34番「マリアの子ども」

ある大きな森の手前に貧しい木こりが妻とともに住んでいた。彼らには三歳の小さな娘がいた。彼らはしかしとても貧しかったので、その子を養っていくことができなかつ

た。木こりは大いに悲しみながら森に出かけた。彼は子どものことが気がかりでこれからどうなるかそればかり考えていた。そうして緑の茂みの真ん中にやってきた。そこに突然、美しい女性が目の前に現れた。その顔は光り輝き、衣服は空色をして銀色の星がちりばめられていた。その女性は男に言った。わたしは聖母マリアです。わたしはおまえが自分の子を養えないのを知っています。子どもを連れて来なさい。わたしが引き取り、その子の母親になります。木こりは急いで家に帰ると、子どもを森のなかへ連れてきた。その子ははじめは輝いている女の人を見て、怖がっていたが、すぐにその女性のもとに行き、手を握った。聖母マリアは子どもを天国へ連れていった。そこでは子どもは金の服を着せてもらい、天使たちがやって来て、一緒に遊んだ。そんなふうその子は長い間、十四の年になるまで、喜びに満ちた、豪華な暮らしをした。あるとき聖母マリアは長い旅行をしなければならなくなった。彼女は子どもに言った。かわいい子よ、わたしは長い旅に出なくてはなりません。ここに黄金の鍵束があります。天国のすべての扉をあけて、中に入っても構いません。しかしただ一つだけ、この小さな鍵であけられる部屋だけはだめです。そう言うと聖母は出かけていき、その子をひとり残した。その子は鍵束を取ると、毎日一つずつ扉をあけ、すばらしい天国の住まいをすべて見て喜んだ。ついにすべての扉があけられ、ただ禁止された部屋だけが残っていた。長い間あけたいとは思わなかったが、ついにその子はあけたいという気持ちを抑えることができなくなった。小さな鍵を取ると、その扉をあけた。そこで子どもは、言い表すことのできない輝きと豪華さにつつまれた三位一体の像を見た。その子はすばやく扉をもとのようにしめた。しかし彼女の胸は不安でいっぱいになり、それはますます高まるばかりで、もはや気の休まることはなかった。その後まもなく聖母マリアが旅から帰ってきた。彼女は鍵を受けとるとたずねた。おまえは禁じられた部屋をあけなかったか。いい

え、とその子は答えた。マリアはその子の激しく鳴り打つ胸に手をおき、禁を破ったことを見てとった。彼女はもう一度たずねた。しかしその子は再び、わたしは入りませんでしたと答えた。そこでマリアは言った、おまえは天国にいるのはふさわしくない。その子は深い眠りに落ちた。聖母は抱きかかえて地上に下ろした。娘が目を覚ますと、輝いていた天国は消えてしまい、高い樹の下にいた。回りは生い茂った藪に囲まれ、出口は見つからなかった。娘は口がきけなくなり、大きな悲しみと沈黙のうちに日が過ぎていった。木の根や森の果実を食べものとした。その樹には大きな洞があり、その中で眠った。秋が来ると、樹から落ちる葉を集め洞のなかに運んだ。それから娘は木の根を集めて、そうして冬の間、樹の中に座って過ごした。ちょうど春がやってきて木の枝が再び緑になりはじめると、娘は洞から出てきて樹の前の、日のあたるところに腰を下ろした。娘の金色の髪は長く、天国で身に付けていた、深紅のピロードの服にまで垂れ下がっていた。それでその国の王が林の中を馬に乗ってかけてきたときも、娘はそんなふう静かになんとも言えず美しく座っていた。王はその美しい姿に心を動かされ、何者かたずねた。しかし娘は何も答えることができず、同情をひく目で彼をじっとみるだけであった。彼は娘を馬に乗せ、彼の城へ連れていった。そこで娘は彼の妻になった。

一年たち、お妃は美しい王子を産み、王と国の人々はとても喜んだ。しかしある夜、お妃が子どもと二人きりになると、聖母マリアが星の冠と星の衣服を身に付けてベッドの前に現われて、言った。ごらんささい、おまえは口がきけず、幸せではないでしょう。おまえがあつた扉をあけたことを白状しなさい。それともおまえの子どもを連れていきましようか。それでも彼女は、あけていませんと答えた。するとマリアは子どもを連れ去った。次の朝、王は王子がいなくなったことに非常に驚いたが、お妃はとても悲しげに、黙っているだけだった。顧問官たちはお妃が子どもを

食べたと思い、火あぶりにするように求めた。しかし王はそう決心することができない。

一年過ぎて、お妃は再び王子を産む。聖母マリアが現われ、お妃があくまで否認するので、その子も連れ去る。顧問官たちは今度こそ人食いとして罰するように迫るが、王はもう一度拒む。

それから一年たち、お妃は王女を産む。すべては以前と同じようになる。王はもはや防ぐことはできず、お妃は薪の山へ連れていかれる。

いよいよお妃は薪の上に立ち、再び深紅の衣服を身にまとい、金色の髪はほどけていた。そのとき彼女の心は揺り動かされ、ああ、いまこそわたしはすべてのことを告白したいと思った。すると天から光がさし、そこから聖母マリアが堂々とした姿で現われた。彼女は腕に小さな子どもを抱え、両側には二人の大きな子どもを伴っていた。聖母はお妃に近づいて言った。それではおまえは禁じられた扉をあけたことを認めるのですね。お妃は、はいと答えた。するとマリアは彼女に子どもを返し、お妃は言葉も戻って、喜びにつつまれて末長く暮らした。

3 この話は1807年にカッセルのグレートヒェン・ヴィルトによる口頭の伝承をヴィルヘルムが記録したものである。

レケによると、この記録はヤーコプ・グリムによって変更を加えられないで筆写され、その写しが1808年4月にザヴィニーのもとに送られている<sup>9)</sup>。初版以来ずっと第3番目の位置を占めている。

グリム兄弟の注釈には「もう一つの話」として次の話が紹介されている。

貧乏な男が、子どもを養うことができなくなって、森へ行き、首を吊ろうとする。そこへ四頭の黒い馬にひかれた黒い馬車がやってくる。そして黒い服を着た美しい聖母が降りてきて、彼の家の前の藪の中に、お金の入った袋がある、それをやるかわり彼に家の中に

隠されているものを渡しなさい、と言う。男は同意する。お金を見つけるが、隠されたものは妻のお腹の中の子どもであった。子どもが産まれると、聖母がやってきて連れて行くとする。しかし母親はなんとか頼んで、その子が十二歳になるまで待ってもらおう。それから子どもは黒い城に連れられていく。そのなかのすべては豪華で、ただ一つの部屋を除いて、どこ部屋でも入ることが許された。娘は四年間、それに従ったが、どうしても見てみたいという苦しみには勝てずに、隙間から中をのぞく。娘は読書に没頭していた四人の黒い聖母たちが一瞬驚いた様子を見る。しかし養母が出てきて言った。「私はおまえを追放しなければならぬ。おまえが一番失ってもいいものは何か」「言葉です」と娘は答えた。聖母が彼女の口を打つと、血が流れ出て、娘は追いやられた。娘は樹の下で眠らなければならなかった。朝になると、王子が彼女を見つけ、城へ連れていき、母親の反対にもかかわらず、その口のきけない美しい娘と結婚する。最初の子どもが産まれると、悪い姑は子どもを川の中に投げ入れ、病んでいるお妃に血をかける。お妃が子どもを食べたように見せかける。そのようなことがさらに二度あり、弁解のできない、罪のないお妃は火あぶりにされる。まさにお妃が火の中に立とうとしたとき、黒い馬車が現われ、聖母が降りてくる。彼女が火の中を通ると、火は静まり、消え、お妃の方へ近づくと、彼女の口を打ち、言葉を再び戻した。他の三人の聖母たちは川の中から助け出された三人の子どもを連れてきた。悪だくみは明らかになり、悪い姑は蛇や毒まむしの入った樽の中に入れられ、山の上から転がされた [Grimm, S. 7f.]。

初版からグリムの注釈では「聖オットリエ」の伝説との類似性が指摘されていた。

特にグリム兄弟はナウベルトの「昔話集」を参照していた<sup>11)</sup>。グリム兄弟はそこからの抜き書きを残しており、「オットリエにおけるほど子どもの気持ちがよく表されているものはない」と述べている<sup>12)</sup>。

グリム兄弟の書き留めたナウベルトの話は、フライブルクの近くに伝わる伝説で、領主の妻であったオットィリエが身ごもったまま城から逃げ出さざるを得ず、厳寒の地で赤んぼうを産むとまもなく死んでしまう。その時聖母が現われて、養い親になり、天国へ連れていく。天国の内部の聖所を見ることは禁じられていたし、山の頂上から地上を見ることも許されなかった。しかし、誘惑の霊にそそのかされ、禁をおかす。そのため天国から追放される。地上では苦難にあうが、聖母マリアに祈って助けられる、という話である。

グリム兄弟が1807年に彼らの住んでいた町カッセルのヴィルト家の次女グレートヒェンから「マリアの子ども」の話を聞いて記録した後、1809年4月6日にカッセル近郊のアレンドルフに住む牧師の娘フリーデリケ・マンネルという女性から「口のきけない娘」という話を送られた。これはマンネルによる手書きで、1810年の草稿には「啞の娘」という題名で第46番に置かれている。その後この話は第3番の「マリアの子ども」の「別の話」として、注釈の方へ入れられたのである<sup>13)</sup>。

だが、なぜかヤーコブが注釈に入れた「別の話」とマンネルの話の終結部は大きく異なっている。

グリム兄弟の注釈の話では、聖母マリアが火あぶりにされようとしたお妃を助けた後、悪巧みがばれた姑は罰として蛇の入った樽に入れられ、山の上から転がされて死んでしまうことになっているが、マンネルの話では、黒い聖母たちは悪い魔法にかけられており、かれらはお妃の試練によって助けられ、天国に帰っていき、悪い姑は自らの悪意と嫉みのために窒息して死んでしまう。

この違いの理由はおそらくヤーコブがマンネルの話を要約する際に加えた変更と考えられるが、内容面からみると、この違いはかなり大きいと言える。つまり、光り輝く聖母マリアと黒い聖母のちがいはそのまま試練に合う娘との関係の在り方にも大きな違いを与えている。前者では、聖母の教えに背き、誘惑に負けた娘が数々の試練に耐え、最後に娘は聖母に救済され、悪い妃は罰せられるというキリスト教的なモラルの教訓話であるが、後者では黒い聖母は魔法にかけられており、娘の試練に耐える力によって助けられるという

〈救済〉を中心においた本来の魔法昔話に近い。

シュルフも「マリアの子」の話とマンネルの話とを比べて、その違いを指摘し、マンネルの話が注釈に入れられたことを残念がっているが、注釈の方ではその結末が変えられていることには触れられていない<sup>14)</sup>。

(こたか やすまさ 教授)

(1995. 10. 5 受理)

## 注

- 1) 関敬吾『日本昔話大成1』(角川書店、昭和54年)、57—58ページ
- 2) *Die älteste Märchensammlung der Brüder Grimm. Synopse der Handschriftlichen Urfassung von 1810 und der Erstdrucke von 1812.* Hrsg. von Heinz Rölleke. Cologne-Geneve 1975. (以下、Rölleke, Älteste Slg. と略す)
- 3) *Kinder- und Hausmärchen: Ausgabe letzter Hand mit den Originalanmerkungen der Brüder Grimm*, hrsg. von Heinz Rölleke. 3 Bde. Stuttgart (Philipp Reclam) 1980. S. 443 (以下、Rölleke, 1980).
- 4) グリム兄弟自身による注釈のテキストとその引用については、次の3つの版を区別する。
  - (1) *Grimmsche Anmerkungen (1812/1815)*, in: *Kinder- und Hausmärchen. Gesammelt durch die Brüder Grimm. Vergrößerter Nachdruck der zweibändigen Erstausgabe von 1812 und 1815*, hrsg. von Heinz Rölleke, Göttingen 1986. これは『グリム童話集』の初版(第一巻1812年、第二巻1815年)の巻末につけられた最初の注釈である。本文の引用は1986年のレレケ編集による初版のファクシミリ版のテキストによる。以下、[Grimm 1812/1815]と略し、その後引用ページを記す(例: [Grimm 1812, S. v])。
  - (2) *Grimmsche Anmerkungen (die 2. Aufl. von 1822)* in: *KHM. Vollständige Ausgabe auf Grundlage der dritten Auflage (1837)*, hrsg. von Heinz Rölleke, Frankfurt a. M. 1985. この注釈集は『グリム童話集』の第二版(1819年)以後、本文の話より切り離され、初版の注釈に増補されて独立に出版された。現在はレレケ編集による『グリム童話集』(第三版1837年)に収録されている。以下引用に際しては、[Grimm 1822]とし、その後ろに引用ページを記す。
  - (3) *Grimmsche Anmerkungen (die 3. Aufl. von 1856)*, in: *Kinder- und Hausmärchen: Ausgabe letzter Hand mit den Originalanmerkungen*

*der Brüder Grimm*, hrsg von Heinz Rölleke.  
3 Bde. Stuttgart (Philipp Reclam) 1980.

グリム兄弟による注釈集の第三版は、『グリム童話集』の最終版(1857年)の前年にさらに増補され出版された。本文での引用は断りのない限り、この1856年版による。引用はレレケ編集による1980年のレクラム版の第3巻目(ファクシミリ版)のページを記す(例:[Grimm. S. 7]。)

同書には、レレケによる各話の詳細な解説がつけられている。“Nachweise”, Bd. 3, S. 441-543。(その引用に際しては、Rölleke, Nachweise と略す。)

- 5) Rölleke, *Die Märchen der Brüder Grimm. München und zürich* 1985. S. 41.
- 6) Rölleke, *De Älteste Slg.*, S. 343.
- 7) W. A. Berendsohn, *Grundformen volkstümlicher Erzählerkunst in der Kinder- und Haus-*

*märchen der Brüder Grimm* (1920), 1968, S. 98.

- 8) Rölleke (hrsg.) 1980, KHM, Bd. 1, S. 35.
- 9) 関敬吾『日本昔話大成4』(角川書店、昭和53年)、296ページ
- 10) Rölleke, *Nachweis*, S. 443, Rölleke, *Die Älteste Slg.*, S. 278, 280, 282, 371 f.
- 11) *Die vier Bändchen erschienenen >Neuen Volksmärchen der Deutschen < stammen von Christine Benedicte Naubert (1756-1819)*
- 12) *Märchen aus dem Nachlaß der Brüder Grimm*, hrsg. von H Rölleke, Nr. 42 “Ottilienberg”, S. 85-86. S. 108.
- 13) Rölleke, *Nachweise*. S. 443.
- 14) Walter Scherf, *Lexikon der Zauber märchen*, Stuttgart 1982. S. 275.